

茶の湯文化学会会報 No.63

第63号 / 2009年12月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第二十八回研究会 日韓茶文化交流会 報告

水上和則

茶の湯文化学会の第二十八回研究会は、九月二十一日から九月二十四日までの四日間の日程で韓国ソウルにて開かれた。谷会長を団長とした日本の茶の湯文化学会と、韓国茶人連合会との学術交流が今回の大きなテーマであった。

集合

九月二十一日午後、研究会の開かれるソウルに向け、関西地域お住まいの方々十四名は関西国際空港から、関東地域の方々十五名は成田国際空港から出発した。仁川国際空港到着後、迎いのバスで高速道路を走り、ソウル市内中心部にあるホテル、ベストウエスタン・プレミアホテル国都に向かう。市内に入ると道路は混み合い、また突然の豪雨に見舞われる。旅行社の解説では、夏以来天候不順とのことであった。予定時間をかなり遅れてようやくホテルに到着。ここに三泊の予定である。ホテルで関西・関東両グループ集合の予定であったが、関西空港組は飛行機到着がやや遅かったためか渋滞時間に巻き込まれ、関東グループよりさらに三十分遅れて到着した。そのため夕食の場所である市内の有名焼肉店での合流となった。関空より来られた谷会長のご挨拶で、総勢二十九名(旅行社添

乗員一名を含む)の今回の研究会が正式に始まった。

本来研究会の開始は厳かな雰囲気で行われるべきであったが、早く着いていた関東組みのテーブルには、すでにコップに注がれたビールが載っていた。

国立韓国中央博物館の見学

九月二十二日二日目、天気は晴れ。ホテルでの朝食後、大型バスで新しくなった韓国中央博物館へ向かう。その規模の大きさに驚き、自国芸術を誇る展示の企画発想は大陸的と感じた。ここでは、一時間半の見学時間であった。各人館内パンフレットを見ながら、散り散りに目的ブースに向かう。報告者も、限られた時間内で陶磁器と茶文化関係の展示を慌しく見学した。高麗時代の磁器の生産地の多くが現在の北朝鮮にあるためか、期待していた高麗青磁優品の展示数は思ったより少ない印象であった。

韓国茶人連合会と茶文化交流

昼食後、ソウル歴史博物館に移動して、韓国茶人連合会との茶文化交流を行った。講演研究交流と、喫茶会との茶文化交流を行った。講演研究交流と、喫茶会との茶文化交流を行った。講演研究交流と、喫茶会

お手前の実際紹介の二部構成であった。研究講演会は、韓国茶人連合会の朴権欽会長と、続いて日本側の谷見会長の開会挨拶で始まった。谷見会

長(野村美術館館長)・柳建緝教授(圓光大学)・倉澤行洋教授(玉塚造形芸術大学)・鄭英善所長(韓国茶文化研究所)の順次四人のご発表があった。自国茶文化の歴史や、茶文化の精神についての研究成果が熱心に語られた。舞台上で行われた韓国式喫茶法は、報告者は初めて見るものであり、大変興味深かった(写真一)。

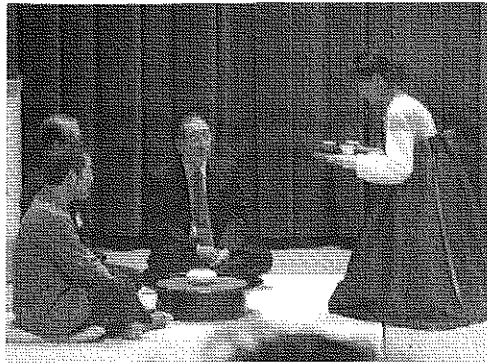


写真1

日本の煎茶法と似ている印象を受けた。また、両国のお手前や喫茶法を紹介し合うことで喫茶交流を行うことを予想していたが、今回はもっぱら韓国側のみであった。講演の合間に会場ロビーで披露される韓国式の略式喫茶は、日本の参加者にとってうれしい歓迎であった。

なかでも、韓国の手作り茶菓の種類の豊富さとおいしさに参加者一同は驚いた。韓国茶人連合会は創立四十年になるという。行きとどいた我々への歓迎の心は、国の違いはあれども、まさに茶の精神であった。韓国宮廷料理のことなど

夕食に、韓国茶人連合会との交流宴席に宮廷料理を味わった。茶人連合会との交流は、会員も数名の方を除きハングルを解せず、韓国側も日本語が分からず日本語中の会員朴珉廷さんを介せずに意思疎通が出来なかった。残念ながら円滑で充分な交流が出来なかった。料理は全体に薄味で、品位好く美しく、美味しかった。ステンレス食器を多用する韓国料理の印象であったが、単に合理からのみで使っている分けではなく、宮廷で銀器を用いていたことからの転用であることが分かった。

現在の宮廷宴席では、白磁の器を用いていたことが印象的だった。李氏朝鮮王朝の流れと大きくお土産をいただき、帰りのホテルへのバス中では会員各人たいそう満悦であった。韓国陶芸家工房と朝鮮官窯分院白磁資料館の見学

九月二十三日、研究会三日目は、ソウル市

うで、資料館行き来の道端では白磁陶片が散らばっていた。

やや遅い昼食後、午後には湖林博物館とサムソン美術館リウムの見学をした。韓国

最終日、報告者は当日午後には日程があり、前日に会員皆様方にご挨拶を済ませ、早朝の便で一足先の帰国となった。会員の方々の博物館見学や楽しい食事、韓国茶人連合会と方々の暖かいご接待と研究交流、第二十八回茶の湯文化学会研究会は充実したものであった。

日韓文化交流の意義と交流発展のことなど
日本と韓国は、海を隔てているとはいえず非常に近い。両国とも、多くの文化を中国より吸収した。仏教や茶文化はその代表といえる。しかし七世紀末から八世紀に東アジアで興る茶文化については、両国に若干の違いがあるように思う。

朝鮮半島は中国大陸と陸続きで、新羅時代の茶文化導入に際して、華北の茶が直接持ち込まれ主流となった。この華北の茶は、固形茶を中心とした教養高い文化人の茶であり、宮中の茶と呼んでよいものであった。海路で朝鮮半島にもたらされた中国江南の茶は、今

南東部にある韓国陶芸家工房と、李朝白磁官窯の一つ分院里窯古窯跡と広州分院白磁資料館を見学した。ホテルでの朝食後八時半にホテルロビーに集合し、バスで見学池に向けて出発した。天気は快晴であった。高速道路を南に走り、ソウル市中央を流れる大河韓江を遡上して南東部の利川陶芸村に行く。ここにある韓国陶窯金正黙(雅号東谷)氏の工房を訪ねる。写真二は韓国陶窯作品展示室の前で、会員集合写真である。



写真2

さらにバスで移動し、分院里古窯跡に向かう。京畿道広州市南終面に位置している古窯の跡地は、韓江東岸にあり平地から山谷に入

回の研究発表でもそれに触れる箇所があったが、新羅時代の陸路からの導入に対して年代的に若干の遅れがあるようである。

一方、茶が日本に渡ってくる頃、わが国遣唐使節はそれまでの朝鮮半島を経由し中国大陸に入る北路から、直接蘇州明州を目指す南路を選択するようになる。その為、日本における喫茶文化普及期には、浙江を中心とした茶文化が多く入っている。江南の茶は散茶を中心とした寺社や庶民の茶であり、形式にとられない豊かで自由な茶であった。このことを表す一例として、奈良薬師寺の九世紀代古建築跡からは長沙窯(『茶経』でいう岳州窯)の水注が出土しており、これは長江河口の当時の最大貿易港である揚州あたりからの請来品と思われる。

わが国との茶文化の違いを表すように、今回見学した韓国中央博物館では、八世紀中国華北請来の器物が多く、華南茶文化の具体的器物の展示品はほとんど無かったように思う。むしろその後の高麗時代でも、華北窯業地の製品や、それを模倣した現在の北朝鮮で生産の茶碗・茶具が多くみられた。華北・華南の両方の飲茶習慣を取り入れ、華南に重心をもったわが国の茶文化では、茶を自由に眺めるこ

る左斜面の高台にあったようだ。ここは梨花女子大学による発掘調査が行われ、その跡地に保存もかねて広州分院白磁資料館がある。資料館の床面や壁面には、官窯白磁の出土状況の分かる実物展示がなされていた(写真三)。

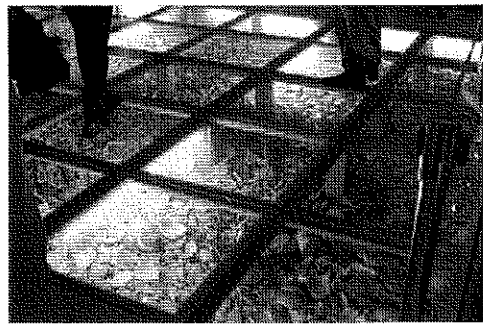


写真3

展示には発掘時に出土した窯跡と工房跡の写真が示され、詳細は分からないが四基までの窯が発見されている。そのうち二番窯は全長二十三メートル幅一、七メートルと報告され、展示写真からは、わが国北部九州で報告される割竹式の蛇窯と近似するものであった。古窯址中心部は現在分院里小学校校庭になっており、特別に保存地域も指定されていないよ

とができたためか、後の点茶・散茶への移行がスムーズであったと言える。

このように日本と朝鮮半島地域では茶文化の茶文化の発展を比較してゆくことで、多くの研究テーマが設定できると考える。学術交流は、大きな学問的収穫が期待できよう。今回の茶の湯文化学会と韓国茶人連合会との文化交流は、交流の歴史的第一歩として重要な意味をもつものであり、今後、両国間の広い分野で、ますますの交流が望まれる。

理事會

平成二十一年度第三回理事会が、十二月六日(日)午後二時から、京大会館二一七号室で開催された。出席者は、会長以下、あわせて十四名、議題は以下の六題であった。

- ①平成二十二年事業計画概要
- ②近畿例会の案内葉書(有料)の可否と方法
- ③大会報告の事前審査導入について
- ④例会制度の検討
- ⑤会誌バックナンバー最近号の価格について

し、次回理事会で再提案することになった。

例會

東京例会

(平成二十一年七月二十六日)

「再考 中興名物」

砂澤祐子

「中興名物」という概念は、小堀遠州自身が定めたものではない。江戸時代後期の大名茶人松平不昧が、遠州を追慕して「中興名物」をその著『古今名物類聚』の冒頭「凡例」で定義したものである。これを要約すると、「藤四郎以下後醍醐焼」と「唐物」「古瀬戸」の茶入の中から遠州が選んで「銘」をつけたものを、「中興名物」と不昧が定義したのである。

『古今名物類聚』に記載され「中興名物」であるにもかかわらず、近年は「中興名物」とされていなかった彦根城博物館所蔵の二つの茶入を紹介する。

一つは「唐物鶴首茶入」である。この箱書付の「鶴頸」の下に書いてある文字の判読が難しくこれまで正しく読まれなかったため、最近刊行した本や展覧会では、「中興名物」

⑥その他

まず①では、大会、研究会、例会それぞれに関して提案があった。来年度の大会については、六月十九日・二十日に名古屋で開催し、初日を研究発表・総会・シンポジウム・懇親会、二日目を茶会とする計画案が了承された。

また研究会は、来年度の海外研究会を一回増やし、韓国での五月のお茶まつりに合わせた研究会を一回、例年九月に行なっている研究会を中国で一回、また国内開催は、できれば四国で一回、開催したい旨の提案がなされた。例会でも、十月に静岡で開催される「世界お茶まつり」の会場で静岡例会を開催したい旨の提案があり、いずれも了承され、これらに向けて準備に入ることになった。

②は、近畿例会の参加者が少ないことに対する提案で、希望者に一ヶ月前に案内葉書を送り、その費用(二百円)は年会費払い込み時に一緒に払い込んでもらう、という方法で行なうことになった。

③の提案は、大会の発表内容を維持するために、事前に発表希望者に千字程度の発表要旨を提出してもらい審査してどうかというもので、来年度から実施することが了承された。また発表応募が少ない場合、例会発表者

から推薦するという案も出された。

④は、今年度から静岡と北陸で新たに例会が始まり、静岡ではすでに三会場、北陸でも福井のほか、新たに金沢でも立ち上げたい旨の話も出てきており、今の「例会」を「支部」に変更し、いまの会場名を「例会」としてはどうか、という提案で、討議の結果、支部制度をとるのではなく、広報のための名称変更にとどめることが確認され、例会内規の変更案を影山副会長が次回理事会で提出することになった。

⑤では、会誌最近三号の価格八千円について検討がなされたが、執筆者の購入に限り実費負担(千二百円程度)とし、それ以外は従来どおりとなった。また一号十三号の一括購入については、特別価格(一万円)をもっと広く告知することになった。

⑥では、会誌の、原稿審査規程および執筆規程の改正案が編集委員から提案され、審査規程第二条を削除することが了承されたが、査読の適用範囲や方法などについて、なお種々の意見が出され、現在の「論考」は「特別寄稿」の意味と解釈して査読なしで掲載する、「論文」は査読する、「研究ノート」は査読しない、という方向で編集委員会で再度検討

「古辞書に見える茶の異名―広本節用集を中心として」

高橋忠彦

中国では、茶の異名が大量に生産され、文人文化に於ける茶の重要性を示している。日本の古辞書に於いても、『和名類聚抄』以来、茶の異名が収録され、独自の発展を示した。それは三つの段階に分けて考えられる。

第一は、平安末から鎌倉にかけての、『和名類聚抄』や『色葉字類抄』の段階で、茶の字書的な異名の「薺」や「茗」を収載するが、それは「茶」の単なる言い換え以上の意味を持たず、文化史的な意義は薄い。

第二の段階は、室町中期の、一四四四年に『下学集』が成立して以降、伊勢本系節用集類が発展した時期である。この時期は、「好き茶」とされる「鷹爪」「芳茗」、「悪しき茶」とされる「雲脚」「箴屑」など、茶の評価の用語が異名として辞書に掲載されるようになる。

第三の段階は、やはり室町中期であるが、雅語的な異名を収録する辞書が成立した時代である。百四十八種に及ぶ茶の異名を載せる伊勢本系の『広本節用集』、『碧粉』、『烹雪』、『留客』、『欲仙』の四つの異名を付加する印

度本系節用集、二、三十の茶の異名を集める『新撰類聚往来』、乾本系の『易林本節用集』、和名集類の『宣賢卿字書』が登場する。これらの異名は、純粹な雅語であり、中国茶文化が教養とされたことを示している。

中でも『広本節用集』の異名は桁違いに膨大で、以下の特徴を持つ。一、唐宋の茶詩、特に蘇軾・黃庭堅・陸遊が使用した語が目立つ。二、『韻譜群玉』を介して、毛文錫の『茶譜』より、まとまった資料を採っている。三、中国に於ける茶の異名と重なるものは少ない。四、盧仝の茶歌に由来する異名が多い。五、理解できない語として、「伝話」「祖一」などがあるが、日本の造語であろう。六、日本の造語であるか否かを問わず、中国文化を意識した言葉であるのは確かである。七、唐詩より採られた語より、宋詩の語の方が、圧倒的に多い。これは、鎌倉・室町の文化に対して宋の影響が強いることがその理由であろう。

(平成二十年十一月二十九日)
「特別展『古渡り更紗』によせて」

佐藤留実

名物道具を包む風呂敷には、しばしば「更紗」が用いられている。だが、あらためて「更

紗」とは何かと問われれば、そのイメージは漠然としているのではないだろうか。

二〇〇八年十月二十五日から十一月三十日にかけて、五島美術館では「古渡り更紗」に焦点をあてた特別展を開催した。「更紗」とは、木綿に草花・鳥獣・人物などの文様を、型や手描きによって染めた布のことである。なかでも江戸時代の人々は初期に舶載された更紗の一群を「古渡り」と称し珍重していた。実はこれらは全てインド製なのである。

紅毛貿易などにより舶載された鮮やかな色彩の更紗は、いちはやく大名の陣羽織や若者の小袖などに仕立てられ、当時のファッションリーダーの間でもはやされた。やがて安永七年(一七七八)には、『佐羅紗便覧』が刊行されるほど、更紗の人氣は高く、特に「古渡り」は、文様によって「こま手」「笹曼手」などの名称が付き、アンティークの貴重さ故、高値で取引された程であった。

この展覧会では、前述の『佐羅紗便覧』や『増補華布便覧』などを参考に、現存する「古渡り更紗」総点数約三七〇点を紹介した。作成などを考える参考作品とした。品は陣羽織をはじめ、間着、更紗表具、茶の湯の包み裂、煙草入れ、鑑賞用の手鑑など多岐に渡る。特

に「古渡り更紗」の基本資料として著名な、彦根藩主井伊家伝来の「彦根更紗」(東京国立博物館蔵)を可能な限り一堂に展示し、図録にその内容を収載した。この他、インドネシア伝来のインド更紗の全形も展示し、本来の文様構成などを考える参考作品とした。

大航海時代とともに海を越え、日本・ヨーロッパ、東南アジアなど世界の国々で大ブームを起した更紗。その影響は多方面に渡り、現在に至る。日本における「古渡り更紗」を紹介した本展と本図録が、今後の更紗研究の一助になれば幸いである。

特集陳列「茶人好みのデザイン」彦根更紗と景徳鎮」を振り返って 三笠景子

二〇〇八年秋、東京国立博物館平成館一階の企画展示室において、特集陳列「茶人好みのデザイン」彦根更紗と景徳鎮」を行った。これは前年に富山県佐藤記念美術館が開催した「広田不孤斎(広田松繁)コレクション中国陶磁の名品」展がきっかけの一つとなった。この展覧会に当館の広田コレクションの作品を出品した際、東京でも広田コレクションの名品をまとめて展示したいと考えたからである。

現在の中国江西省景德鎮窯でつくられた明時代の五彩、青花磁器は、日本にも将来され、人々に親しまれてきた。広田コレクションの明時代の陶磁器、特に不孤斎が好んだ茶道具・懐石道具の器には、自身があつらえた愛らしい裂が仕覆や包みに用いられている。そこで、器ひとつひとつを美しい裂で包み、箱を作った大切に収納する日本独特の習慣に注目してみた。

当館には「彦根更紗」と呼ばれる古渡りのインド更紗四五〇枚のコレクションが収蔵されている。これは、彦根藩井伊家に伝わった古渡り更紗(一部、更紗ではない裂も含まれる)を和紙に貼りつけて装丁したものである。偶然にも、広田コレクションの仕覆や包みには、「彦根更紗」に共通するデザインがいくつも見られる。こうして「彦根更紗」と景德鎮の五彩と青花を並べて展示することとなった。

一六世紀から一七、一八世紀にかけて、日本に将来されたインド更紗と中国の陶磁器。ともに日本からの注文制作の可能性が指摘されている。陶磁器では古染付、祥瑞と呼ばれる青花磁器が目されるが、注文の過程は現在のところ明らかではない。

これまで発表者は、陶磁器生産の背景にあ

る、金属器や漆器など他の工芸品との造形上の影響関係、相互関係について関心を持って研究を続けてきた。鮮やかな色彩と魅力的なデザインで日本人を惹きつけたインドの染織品が、同時期の中国陶磁の生産に影響を及ぼしたのではないか。そこには茶をたしなむ人々が深く関わっているであろう。今回の展示ではこのような試論をたてた。しかし結論を導くにはまだ時間が必要であり、引き続き考察を続けたい。

東海例会

(平成二十年四月二十五日)

「竹川竹斎『川船の記』巻五」

岩田澄子

竹川竹斎は玄々斎(裏千家十一世)との深い親交で知られるが、全八巻からなる茶道点前書『川船の記』の『巻五』は、その大部分が桜田門外の変関連情報であることが判明した(約二〇頁分)。茶書偽装である。冒頭は唐物点前で、その後突然に事件情報が展開するが、途中二ヶ所にニセ茶会記を含む構成である。生々しい事件報道の一方で、駄洒落の文芸作品が多種多様に存在する。

極秘情報は、七十五冊に及ぶ日記(全文翻

刻済み)や玄々斎家元との交流を伝える「茶会記」ではなく、家元直筆より資料価値が低い「点前書」に混入されていた。

竹川家は幕府御為替御用方もつとめる伊勢の豪商で、荒木田久老(加茂真淵の高弟)を祖父に持つ竹斎は、『海防護国論』等を著し、勝海舟・大久保一翁らに意見を求められる字者であった。しかし、桜田門外の変直後も果敢に開国を主張し、茶の栽培を奨励して横浜から実際に茶葉の輸出を行なった竹斎は、名指しで命を狙われていた。

『巻五』のニセ茶会記は、一見すると、献立や茶道具などが完璧に記されている。しかしよく見ると「薩摩形他家組の炭斗、足屋切合の釜、政事の水指、後むつかし(後昔)の濃茶」など、全体が駄洒落で埋め尽くされている。『巻五』のほとんどは、竹斎が情報を集め、編集者のような立場で筆録したものである。しかし、ニセ茶会記は、事件情報と茶事に精通しなければできない内容で、竹斎自身の作と思われる。

(平成二十一年四月二十四日)

「慶栄寺の折り畳み茶室「御席屏風」をめくり」

長谷義隆

移動式・組立式茶室の変遷の中で、きわめてユニークで完成度が高いのが、名古屋市區那古野の真宗大谷派寺院、慶栄寺所蔵の「御席屏風（おせきびょうぶ）」である。屏風仕立てで収納されている壁面を広げて、屋内の座敷で組み立てて使う。寄り付き、小間、広間の三席そろった江戸時代製作の折り畳み茶室は他に類例がなく、きわめて貴重といえる。このうち、比較的傷みが目立つ広間席は今春、徳川美術館（名古屋市中区）に修復、公開を条件に寄贈され、ことし四月末から約一ヶ月間公開され多くの入館者を集めた。

寺伝によると、尾張徳川家が一八六〇（万延元）年、江戸屋敷に諸大名を招き大茶会を催した後、名古屋に持ち帰った。それを時の藩主徳川慶勝と親しかつた十一代住職が一八六五年に拝領。殿様の命で「龍臣大工匠」が作製した、とされる。

六畳広間席（縦二・六畳、横三・一畳）と四畳半小間席（縦横二・三畳）の茶室二席と、待合室に当てられる寄り付きの四畳半からなる。三席とも屋根までの高さは約二畳。折り畳まれた計三十九面の屏風（厚さ一八センチ）三組を広げて、屋根や障子などの建具をはめ込むだけ。軽量、コンパクトで、二人がかりで

一時間程度の作業で済む。なお、寄り付きは壁面は三方囲いで、正面の壁面ははじめからない。これは、客が座敷の襖を開けるとそこから折り畳み茶室の世界に導かれるよう、サプライズ設計したと推測される。

その造作は本格的、徹底した薄造りで軽量化を図っている。客座や点前座によってデザインや材料、天井高を変える茶道の「真・行・草」に則り、複雑で密度の高い空間を創出する。アイデアに富んだ仕掛けも満載。土壁に似せた和紙張りの屏風を開くと、扉や中柱、つり棚、灯明立て、床の間、刀掛けなど茶席専用のしつらえが立体的にせり出してくる。茶室の起こし絵図さながらの発想、仕掛けである。

外来の科学技術に関心が高く、当時先進の写真術を学んだ慶勝の趣味を反映するように、江戸の尾張藩邸の市ヶ谷屋敷からの景色と思われるガラス写真障子に組み込み、扁額の書もわざわざ写真にしてあり、時代精神が宿る。

これに先行する折り畳み茶室では、江戸中期、京都の西本願寺十八代文如上人好みの小間席「蛭籠」がある。同様に屏風仕立てで、天井には網代組と紗を張る。御席屏風はこれ

をモデルに、さらに発展した形で設計された可能性がある。

なお、報告者（長谷）は名古屋とその周辺の埋もれかけた有形、無形の文化遺産を掘り起こす取材活動の中で、その存在を見いだし、寺に働きかけた結果、三十年以上しまったきりになつていたので、虫干しを兼ねて組み立ててもらったことに成功した。

所属する中日新聞の二〇〇八年十一月二日付朝刊で連続写真を添えて報道するとともに、同紙夕刊に半年間連載した「忘れ水探訪」で三回にわたり調査報道し、この折り畳み茶室をめぐる時代背景や慶栄寺茶室群の歴史的な由緒を掘り起こした。同六日付「折り畳み茶室 拝領秘話」、同十三日付「都心の秘境 慶栄寺松濤園」、同二十日付「エコの小宇宙 組立式茶室」である。

近畿例会

（平成二十年十一月十五日）

「風炉濃茶」「一杓の水」をめぐる諸問題

廣田吉崇

風炉の濃茶点前では、湯を茶碗に汲む前、釜に「一杓の水」をさす流派と、ささない流派との違いがある。点茶の際、この「一杓の

水」をさすことについて、『南方録』には、風炉の時期、茶が古くなり、茶の気が弱まるためであると語ったという千利休の逸話があり、現在でもそのような説明がなされている。しかしながら、この考え方は妥当なのだろうか。

歴史的文献を検討すると、この「一杓の水」について、新茶・古茶の別という「茶の新古説」ではなく、暑さが厳しいときに釜の湯の沸騰をさけるために水をさすという「熱暑沸騰説」が当初の理由付けであったと考えられる。ところが、「熱暑沸騰説」によるならば、暑さが厳しい時期とそれ以外の時期により、「一杓の水」をさす・ささないと点前が複雑となる。そこで、風炉の点前は、「一杓の水」を必ずさす（千家流等）、ささない（遠州流、石州流等）と、整理されたものである。さらに、その後、「茶の新古説」と、さらに、水をさして湯の状態を変化させるという「湯の改め説」があらわれたものと考えられる。

このことは、「風炉濃茶」ならず釜に水さすと一筋におもふ人はあやまり」という教歌が、現在の通説である「茶の新古説」では、説明がつかないことから推測できる。この風炉濃茶「一杓の水」をめぐる形成過

程では、点前が整理されるだけではなく、風炉・炉の使い分け、茶の新古の別という事柄も「同調（シンクロナイズ）」することによって、点前を夏と冬とで峻別する、わかりやすい形態に変化したと考えられる。炉開きや口切の時期が固定化したのもその一例である。現在では、「茶人の正月」と称して重要視される口切の行事は、千利休の時代にはもちろん、千宗旦の時代にも確立していなかった。

では、『南方録』の利休逸話はどのように考えるべきなのであろうか。現在、『南方録』は、立花実山の編集によるものとされるが、この逸話も、当時の千家流の教えをもとに創作されたものである。そして、近代に『南方録』の内容が広く一般に知られるようになった結果、『南方録』にある「茶の新古説」が正しい考え方として流布するに至るのである。このように、点前が形成される過程で、新たな言説が生み出され、その言説が流派の考え方を規定していくことが、風炉濃茶「一杓の水」を通じてうかがえる。

（平成二十一年七月十八日）

「煎茶と文房具」

大槻幹郎

与えられたまま、語義を限定すると、いずれも日中の文人たちが、趣味として嗜みとしての文人茶で葉茶を用いる煎茶、詩文・書画の為のまた賞玩品としての文房具である。唐代陸羽の茶経に象徴される茶文化を祖型として甲骨文以来多様な文字文化を形成して、その表現手段としての文房具を生み出した中国、それらと受容し独自に展開した日本文化の様相である。

歴史的には、奈良時代に唐代の硯・墨・筆・紙が齎されて正倉院に伝来し、平安時代には入木道として和様化した姿がみられる。北宋には蘇居簡の文房四譜が成立し、南宋に林洪の文房図贊、文人趣味の知識書洞天清様集がある。明代には長物志・適生八牋・考槃余事など、江南の豊かな経済基盤に育った中心地蘇州の呉派文人達のこれからの所産が目目される。宋元の文化は禅宗の受容と共に摂取され、鎌倉時代には円覚寺の仏日庵公物目録に上流階級美術工芸品賞玩の様相を伝え、室町時代には君台観左右帳記・御飾記などにその流れが見られる。総称される五山文化は、宋元の禅と共に諸文化、文人趣味を受容し伝統文化と融合する。やがて成立する茶の湯にもこれらの要素が取り入れられるのである。

織豊政権期に中断した日明貿易は徳川政権により再開し、長崎唐人貿易によって鎖国制度下で限定的ながら積極的に文物の摂取が行われる。新たな明新文化と共に広く中国古典文化を再検討し、深化し融合させる時代が現れる。

この契機は、一六五四年福建省黄檗山の隠元の渡来により、山城宇治に黄檗山万福寺が建立、新教団が形成され、江南の文人趣味受容に渡来黄檗僧たちがその役割を荷うのである。これが明確になるのは池大雅に代表される文人画の成立であり、黄檗僧の文人茶を次いだ売茶翁による煎茶の出現である。同時代大杖流芳の青湾茶話改題煎茶仕用集・雅遊漫録は、呉派の茶書・文人趣味の書を基礎に日本の伝統もふまえた雅遊の書として、煎茶と文房具を内包し近世の文人趣味の成立を示している。

文人層の拡大は文人趣味が広まり、文人茶(煎茶)が普及して茗筵図録に象徴される煎茶趣味が高揚し、和漢の書画・文房具の展観席が設けられるに至る。そこで賞玩具として茶具・文房具の蒐集が行われ、鑑賞の場が設けられるに至るのである。

平成二十二年大会発表者の募集

平成二十二年大会の日程が左記のとおり決まりました。

日時 平成二十二年六月十九日(土)・二十日(日)

会場 名古屋文化短期大学

研究発表の部は十九日で、例年どおり一人三十分(発表二十分質疑十分)を予定しています。その発表者を募集しておりますので、ふるって応募下さい。なお、応募される方は、二月末までに、発表タイトルと千字程度の発表要旨をお送り下さい。予定人数に達し次第締め切らせていただきます。

予定では、十九日には研究発表・総会・シンポジウム・懇親会を、二十日には茶会を開催する計画となっております。

例会のご案内

東京例会(会場 五島美術館講堂 午後二時)

日時 二月二十七日(土)

「大東急記念文庫の茶書」 村木敬子氏

「未定」

福島洋子氏

北陸例会(会場 無限庵 午後二時)

日時 三月二十七日(土)

見学会 無限庵(早茶あり)

石川県加賀市山中温泉こおろぎ橋 岩頭上がる

(電話0761-78-0160)

勉強会 「山中塗りについて」

前端的雅峯氏

「君台観左右帳記の伝授と戦

国武将の交流」 宮永一美氏

会場近傍にての懇親会(参加自由)も開催します。

高知例会

日時 二月七日(日) (会場 高知県立文学

館慶雲庵茶室 午前十時)

「平面図で見る茶室構造」 柏井 武氏

このほか、一般の方々が茶の湯に親しんでもらうための茶席を、毎週日曜日を主体(十時～十六時)に同所で設けます。